

質疑応答・討論（1日目） 加曽利E式土器前半の様相について

登壇者 小林謙一（コーディネーター）・大村裕・黒尾和久・塚本師也

小林（コーディネーター）：

そうしましたら、このあと質疑応答するんですけれども、最初にちょっと先立って、大村さんのほうから発表の補足ということで少し用意していただいたものがございますので、そちらのほうを先に、大村さんにご発表いただいて、説明をお聞きしたいかなと思うんですけれども。では大村さん、よろしくお願いします。

大村：

先ほどの私の話は、ずいぶん古い事例ばかりでしたので、最近の事例をちょっとご紹介したいと思います。柏市の小山台遺跡B区という遺跡なんですけれども、調査対象面積が10万㎡もある遺跡です。山内清男博士の発掘っていうのは手弁当でやっていますので、だいたい2mグリッド四方で発掘しているんですね。ですので、出土土器は破片が中心で、まあ完形の一括資料なんていうのは期待できないわけなんですけど、山内氏は非常に巧妙な型式学的な操作を層位的な所見も交えてされています。これに比べ、例えば小山台遺跡B区で出土した遺物は、総量19トンだそうです。このように膨大な遺物を前に、山内清男氏の型式学では到底対応できないという状況が現在にあります。それで、埼玉県の谷井彪さんなんかは、今までの型式学はちょっと使えないということで、「縄紋中期土器群をⅠ期、Ⅱ期・・・」っていうような形で区分し、それを基準にして各都県にまたがって整理しています。それがおそらく「新地平編年」なんかに少しは影響したんじゃないかと思います。そういう数字で整理して、細別型式の齟齬をある程度解消するという事です。さて、この小山台遺跡B区の報告は、西川博孝さんという方が非常に苦労されて作られたもので、非常にいい報告書（『柏市小山台遺跡 B区 縄文時代以降編』千葉県教育振興財団、2019年）なんですけれども、その中でいくつか、層位的に検討できるデータがありましたので、ご紹介します。対象地域は、小山台B区の「エリア4」というところです（スライド2）。そのエリア4というところの、その中の「23区」という小区があるんですけれども（スライド3）、ここで検出された遺構が(23)SI001です（スライド4の左側上段が全測図）。ここで、主要な土器をこういう風にドットを落としたわけですね（スライド4参照）。これは皆さん、最近では当然やっているんですけれども、私のような発掘を生業としない者からすると、このドット分布図と土層断面図の対照を是非やってもらいたい。そうしないとどの層から出たのかわからないんですね。ですから、「遺構一括」っていうことで扱われていますけれども、実は出土土器の層位的区分がドット図と土層断面図を対照することによって、出来るかもしれない、という問題意識を私は持っています。「住居址一括」とか「土坑一括」っていうのは、私は疑問を持ちながら報告書を検討しています。そこで、この土層断面図をドット分布図に投影してみます（スライド5）。こういう風に投影すると、それぞれの土器がどの土層から出たのかわかる程度推定できます。もちろん、厳密に対応はできないわけですが、ある程度の目安という形で区分ができるんじゃないかということですね。もう私は十数年来、実践しているわけなんですけど、他の研究者の方々もちょっと試みていただいたらいいんじゃないかなと思います。

そこで層位的に並べたのが、お手元の当日資料というものです（当日資料1：311ページ）（同じ図をスライドに映写）。まず1層からご紹介します。ここに在地の勝坂式（4－47）があります。それから、「仮称小山台（23）SI001型深鉢」とされているものがここにありますがね（4－59）。ただ、特異な土器であることはわかるんですけども、ちょっと顔つきが違うものたちがこの土器に加えて一括されています（註：4－59のほか4－64、4－65、4－66、4－67が「仮称小山台（23）SI001型深鉢」の標準資料とされている）。それで、私どもの「〇〇深鉢」（「類型」として設定）とはちょっと概念が違うかな、というような印象を持ちます。塚本さんはこの用語を今回の予稿集でも使用されていますけども、西川さん自身も「仮称」と言っていますし、「単一の類型」ではなさそうなので、用語の取り扱いを注意していただきたいと思います。それからこれ（4－61）は中峠0地点型です。そのほか、これ（4－67）は、私は中峠6次1住型だと思ったんですけども、他の会員の方から、「中峠0地点型に類似するものではないか」という意見もございました。これ（4－66）は中峠6次1住型です。私は個人的には「類似している」としたい。標準資料の口縁はカフス状に立ち上がっているんですね。これにはそれがありません。それから、これ（4－68）は中峠0地点型。

次に「1層とそれ以外の土層出土」の部分を見てください。この箇所の説明をします。例えばこれ（4－75）は、出土層位が「1・4層」と書いてありますが、これは1層と4層に分かれて記録されているということです。報告書では、〈中峠6次1住型の文様が体部に施されているものだ〉というような記述でしたけれども、体部にこういったような文様がある以上は、勝坂V式かなあなんて思っています。これ（4－64）はくだんの「小山台（23）SI001型」とされていますが、私共は加曾利E1式と認識しております。これも1層と2層から出ています。ドット図と土層断面図の対応を二度ほど検討したんですけども、ちょっとトレーシングペーパーがずれるだけで土層がずれますので、あくまでも目安として見てください。続いてこれ（4－65）は「小山台（23）SI001型」に区分するということで報告されています。私は中峠0地点型と思ったのですが、口辺部に6次1住型に特徴的な集合沈線が施されているし、ここ（註：眼鏡状突起の直下）には縄紋が入り込んでいるので、「中峠0・6次1住・加曾利E1式の折衷」ではないか、というような結論になりました。ちなみにこの、1と3を「－」（ハイフン）で結んだのは、1層と3層の土層区分の境界にドットがあったということを意味しております。そしてここ（4－48、49、50）に在地の勝坂式（恐らくV式相当）がございます。なおここには阿玉台式的な土器もあります（4－80）。「V字状貼付文土器」なんていう風に、「下総」の仲間の金子悠人さんが名称を付けました。

次に、3層には中峠0地点型深鉢（4－57）がありますね。その他は「不明」としておきます。そして4層には、これ確か床面にくっついていたら言うんですけども、中峠0地点型の類似（4－74）です。縄紋がありませんので類似としました。4－77は大木8式と思われます。

何が言いたいかというと、様々な土器型式・類型が一つの遺構に混在しているということです。すなわち中峠0地点型が最下層から上層まであり、その中には加曾利E1式とか、勝坂V式とか、あるいは阿玉台式（後半）が混在しているのです。こういうような状態が実態ではないかということをちょっと考えているわけです。新地平編年の方々の型式区分は、ある程度納得できるところもあるのですが、こういう状態に対して「期」という横切りの界線で区切ることが出来るのだろうか。私は常々疑問としていっているところであります。私、70代ですけども、何人もの同年代の友だちが「ガラケー」を使っています。私は「スマホ」を使っています。「ガラケー」というのは1990年代後半から普及して、「スマホ」は21

世紀の初頭に普及しています。それから約20年間、両者は共存しているわけです。そもそも「土器型式」というのはそういう形で続いていくのかなと思っております。そこに線をピシッと引くのが果たしていいのかどうか、私は疑問に思っております。

次に「当日資料2（312ページ上段）」（同じ図をスライドに映写）に移ります。同じ小山台B区のエリア2（43）のSI001とSI002ですね。これは西川さんが模式図に整理してくださいました。SI001の住居址がSI002の住居址を切っている状況が模式図に示されています。SI002の炉体土器は阿玉台式の後半、SI001の炉体土器は中峠6次1住型の深鉢が埋置されているということで、両者の新旧関係がはっきりするという形で示されています。

それからこれ（当日資料3：312ページ下段）（同じ図をスライドに映写）は、柏市の大松遺跡（西川博孝ほか『柏市大松遺跡（縄文時代以降編1』千葉県教育振興財団文化財センター、2011年）のSI091の事例です。ここでは、炉体土器が中峠0地点型（No.8）、住居址の最下層に中峠0地点型（No.3）および同・類似（No.2）、それに勝坂V式（No.6）等が混在します。そして、上層には加曽利E1式（No.7）と、中峠0地点型の類似（No.1）等が出土したということで、前後の型式が混在しています。要するに中峠0地点型というのは一つの型式の中に収まるものじゃなくて、複数の型式の中にまたがって存在する。山内清男先生が想定しなかった類型であるということです。こういうものが、柏市を中心に膨大に出ています。そういうのが現状でございます。以上です。

小林：

はい、そうしたら質疑応答という形で進めていきたいと思っておりますので、講師の皆様お願いします。私のほうで司会ということで進めていくんですけども、皆様からご質問をいただきましたので、それを適宜折り込みながらですね、今回の初日は、特に研究史的な部分の整理と、それからやっぱり加曽利Eの前半段階ということがテーマだったんですけども、そこにこだわって話を進めていきたいと思っております。

先ほどご発表いただいてきたんですけども、今、補足発表もあったんですけど、取り上げる論点が2点あります。一つはですね、その加曽利Eの成立期の段階においてどのようにその型式的な把握を進めていくのか、編年研究を進めていくのかというのが1つめの点だと思います。それからもう一つ、今回こちら加曽利貝塚100周年というのを記念して、千葉市のほうで行っていることの意義として捉えていきたいなと思っていたワンテーマとして、先ほど黒尾さんの発表の中でも出てきたんですけども、縄文中期の研究、編年研究というのは、基本的には西関東、東京・神奈川・埼玉あたり、南西関東を基軸として進んできたんですけど、当然ながら、今回は東関東という部分に大きく注目しながら議論してきました。ただその間で、先ほどから出ている様々な考え方に伴う、編年研究の齟齬ということ、また併行して、といいますか。それとリンクしながら、西関東と東関東の編年対比ということが十分なされていないというのがありまして、そういった点でも様々な形で、不都合というわけではないんですけども、研究上の問題点が得られてきたものですから、完全な形で対比にはなかなかかなりできないんですけど、簡単に対応させていきたいと思っております。

先ほどの加曽利博のほうで用意していただいている（予稿集の）5ページのところに、対応表を作っているわけですけども、ここを見ていくと、ちょっとここはどうかあみたいところがあるんですね。その辺でちょっとこの線（予稿集5ページ「加曽利E式土器の細分・表記の対応」の上2段の

E I と E II、3 段目の E1 と E2 の境の位置）を動かしてみたらいいんじゃないかっていうところもあったりするので、その点、少し皆様から、特に前半段階のほう含めて、整理していただけたらな、と思っています。

ということで、最初に簡単に皆様から一言ずついただきたいと思いますけど、その中で質問としていただいたもので、前半段階のほうにかかりそうなものとしては、一つは北関東のほうで塚本さんにお話しいただきました。それに対する質問というわけではないんですけども、これは私のほうが聞いて思ったことなんですけれども、今回北関東のほうですね、阿玉台の終末期の動向というのは、直接、加曽利 E の成立にこれまで考えられてきたような形での影響関係というのは、一回ちょっと再検討しなくてはいけないんじゃないか、みたいなことが一つ指摘されると思います。また、阿玉台系の土器群っていうのが、その終末期にどのようなになったのかなというのが、一つ疑問というか、興味があるんですけども。大木 8a 式が拡大されていってそういうのもすぐ整理されてもいいんじゃないかということが、ご提言としてあったのが結構重要ではないかと思うんですけども。そういった点、先ほど塚本さんの研究の方向性とか今後の課題っていうのは提示されたんですけども、特に阿玉台終末期と加曽利 E の初現期っていうのは、少し古い部分、山内の最も古い部分よりも古い段階を、既に今のところ塚本さんは深めてやっていたらしゃる。それで齟齬も出てくるんじゃないかという指摘があって、今後細別していくという話もあったんですけど、ちょっと難しいと思うんですけども、阿玉台終末期が伴うものがそこにあるのかどうか、やっぱりその段階で阿玉台がなくなっているということでもいいのか。それは西関東で考えている、我々にとっては、自分たちの言葉でごめんなさい、9c10a 段階とかって言っているもので、9c 期になるのかどうか。それは中峠に、当然ですけど併行しているわけだから、そのあたりの関係っていうのは整理されているのかどうか、ちょっとわからないなと思っていますところがあります。また、改めて聞いていきたいと思います。

その次に、大村さんに質問が来ていたものですから、それに答えていただく形でまたお考えをちょっとお聞きしたいんですけども。質問としては、中峠式とは現在どのような土器として理解すればいいのか、と。加曽利 E 式成立の時期に一部の地域でみられたものということでしょうか。このあたりをもう少しご説明を重ねていただけたらと思います。

それから、黒尾さんにはあとでその併行関係についてじっくり検討していただきたいんですけど、これは質問としては少し補足することになるかもしれないですけども、加曽利 E 式の細別の始めに、山内によれば、加曽利貝塚の中での比較で分けられてきたっていうことはわかったというか、その後、四細別になったのだけれども、それを山内自身が、どうそれらの各細別を保証する一括資料というのを用意していたのかどうか、これは先ほどの大村さんのご説明で言えば、大木の対応関係ということだから、大木囲貝塚のほうでは層位的な判断があるとそう言っていた。おそらく山内は担保があったんだろうということがわかりました。それを加曽利 E のほうの細別に持ってきたんだろうと。また黒尾さんのほうはむしろ、山内は加曽利 E の中のその型式学的な区分に着目されて、胴部文様帯とかでやってきたことなんだというご説明があったわけで、私が思うに、その頃山内がそういった一括資料を実は持っていて、それを手順としてやっていたわけではないんじゃないかなと思うんですけども、その辺改めてお考えをご紹介いただきたいと思います。塚本さんのほうからよろしいでしょうか。

塚本：

はい、それは非常に厳しい質問です。まず阿玉台式の終末ですが、先ほどパワーポイントで提示したようなものを、私は阿玉台Ⅳ式の組成と考えております。大村さん達は異論があるようですが、そのような

土器群は、阿玉台式を作った連中が作ったのだと思っています。先ほども申し上げましたように、加曽利E式期になっても、そうした土器が残ります。一部では残るのですが、土器の組成を見ていくとそんなに数多く残っているわけではない。細々と息長く続いている。おそらく加曽利EⅠ式中段階ぐらいまでは、阿玉台式的な土器が残っていると思います。一つ陥りやすいのは、文様が崩れた土器が新しいだろうと考えがちです。しかし、阿玉台Ⅳ式の組成を見ていくと、しっかりした標準的な土器と崩れた土器とが必ずセットになっている。崩れた土器が新しいというような捉え方は避けて、冷静に見ていきたいと考えています。阿玉台式がどうやってなくなるかということよりも、なくなる頃に、どういう土器が出てくるかということが、まだ完璧に提示できていないというのが、今日の発表ですね。

土器群がガラッと変わるということをお話いたしました。那珂川流域を見てみますと、まだ腹案なのではないのですが、土器は変わるけれども、把手の型式学的変遷はずっと連続しています。それから、もう一つ頸部と体部の境目の線の引き方、これも系統的に続いています。安定した加曽利E式的な土器になると、頸部と体部の境目の線が消滅しますが、それがまだ残っている段階、先ほど示した段階でいいますと、滝ノ上SK512というセット、そういったものを間に介在させていけば、もう少し細分していくことができる。その段階が概ね阿玉台式が土器組成のなかで一定の割合を占める時期の終焉になっているという気がします。

こういう議論をするときに、今日の発表では、そういう発表の仕方はしなかったのですが、「どこの一括遺物の段階」と指摘しないと、共通認識は得られないと思います。そういう指標となる資料をきちんと提示して、土器の編年的位置づけと示していく。これからはそのようにしていきたいと思います。

今一生懸命やりたいのは、那珂川流域と下総台地の並行関係を茨城県の東南部で見つけることです。新地平編年の9b期、9c期とどう対比されるかは、今のところ、どうやったらいいのか思いつきません。私の提示した栃木県や茨城県の土器に対して、事前の検討会の時に黒尾さんが、「これは9b段階、これは9c段階」というふうに指摘されていました。そういう指摘を参考にして、研究を進めていけばいいと思っています。以上です。

小林：

ありがとうございます。時間の関係もあるので、北関東の加曽利E式初現期のことは今後別の機会にして、大村さんに改めて中峠諸類型の土器について考えたことを言っていただければと思います。

大村：

出現ということですか？地域的な問題ですね。

小林：

そうです。

大村：

中峠式土器の共同研究が1970年代に行われたときに、東京在住の芝崎孝さんが東京では中峠式土器がほとんど見られないと。「中峠式っていうのは、ちょっと再検討すべきじゃないかな」という提起をしているんですね。あと、戸田哲也さんは、これも古参会員で、主力会員だったんですけども、神奈川の遺跡を掘る中で、神奈川には中峠式が認められないということを報告書の「まとめ」かなんかで書いたものがあります（註：「戸田さん」は大村の記憶違い。正しくは戸田哲也氏の「指導のもとに」相原俊夫氏が執筆。『横浜市梶山北遺跡発掘報告書』1985年）。栃木や茨城・千葉、そういった地域に限定して主に分布したのか

な。ただ「中峠式」に包括された台耕地型深鉢なんかは東京や埼玉で見られます。5次2住型深鉢なんかも、黒尾さんが報告した原山遺跡なんかで1点、確かあったと思います。まあ主力はやっぱり東関東ということになります。武蔵相模のほうではあまり多くはないと思います。それでよろしいですか。

小林：

もちろん中峠諸類型というものが、中峠式っていう形で一回、中間形式として設定されたんだけど、それを一回解消をして、改めてその実態を探っていく中で、その地域的な、これも実は質問にあったんですけども、類型（タイプとかカテゴリー）というのは、どのように考えたらいいかというご質問があったんですけど、それは人それぞれあるかと思いますが、そのような型式内のバリエーションとしての、諸類型という形として整理されていくという過程で考えてきた状況だということだと思います。それぞれ、例えば今日の発表でも塚本さんも北関東のほうに様々なタイプがあるという形を整理されていると聞きましたし、また新地平のほうも、特に勝坂最終末から加曽利E初頭に関して中山さんとか黒尾さんとか、様々なタイプを作っていて考えていると思うんですけども、そういった形での実際の動態を捉えていく一つの方策であるという風に私は理解しております。

次に黒尾さんのほうに振りたいんですけど、さっきの山内さんの加曽利E式の基準資料があったかという、たぶんそれはなかったということでもいいかなと思うんですけども。なかったという一言でよろしいんですけど。山内さんの設定のときのあれ（先史土器図譜などにおいて層位的な一括性を示す資料だったか）ですね。

黒尾：

基本的には加曽利E式の一括資料を山内さんが持っていた事実はないと考えていいと思います。もっとも、それを今確認する術がないんですよ。ですから例えば「真の加曽利E地点の土器」、あるいはD地点で確認した土器について、それが例えば千葉市が持っているものでなくとも、東大などで確認でき、その資料がどんなものであるのかを、今の段階で見られるようなことがあれば、少し考えていく余地があると思います。ただ、山内さんの資料の見方は、貝層を掘って行って、そこに出ている層位的に出てくる破片をとにかく集めて、きちっと層位の累重に合わせる形で整理しながら、概念化して、抽象化していく方法だと思いますので、たぶん一括資料のイメージというのはおそらく報告書『井戸尻』の刊行以降、ぼくらの先輩たちが考えていくようになったのだと思います。竪穴住居における加曽利E式の出土状態については、吹上遺跡をめぐっての栗原文蔵さんと下総考古学研究会のやりとりなど、ぼくらは学んできたんですが、先ほど、大村さんのお話のなかで一括資料には古いものと新しいものが混在する形であるのが実態であると述べられていましたけど、たぶん山内清男の作業はそうした資料実態の中から新しいものと古いものとを分けて抽出していく、つまりいうなれば「製作時の同時性」を意識していくものではなかったかと思います。Aがあって次にAとBがあって、次にBになるという実態があれば、A→Bであると見ていく。まあ私や小林さんがやっている文様要素による編年というのがそれに近いんだと思うんですけど。ただ一括出土している土器群には「廃棄の同時性」が認められると思います。常にAとBが一緒に出るんだったら、AとBは同一時期のものになります。しかし、加曽利E式あるいは勝坂式でもそうですし、私たちの「新地平編年」でもそうですが、例えば7a期と7b期の土器が常に一緒に出てきたならば、7a期と7b期を区分することはありません。土器群の出土状況を確認して、これは時期区分として相当であるという南武蔵の加曽利E式の「古い段階」の漸移的な変化を今日もスライドでお見せしたところです。確

かに常にY（撚糸文）の土器（加曽利E1a：10a期）、常にY+ r（撚糸文+隆起線）の土器ばかりが出土するのではなくて、古い時期様相の埋甕炉があって、その覆土に出てくるものは新しい様相を含むものも出てくる。あるいは古いものだけで竪穴の構築から埋没までが閉じてしまうものもある。そういうものを数多く確認して蓋然性を高めていくことによって、時期区分としての土器編年の精度を高めていく。そういうことをやってきているわけです。その上で、まさに大村さんのおっしゃったことをこれから我々も益々意識し「ああ、こういう類型は常に一緒にあるんだ」ということが確認できることが大事だと思うんですよね。それで私たちの編年において9b・9c期が括弧付きの中峠式と私たちが呼んできたものが出てくる段階に相当するんです。中山真治さんは、なんとかタイプという類型をたくさん用意して、勝坂式最終期の複雑な状況を説明しようとしています。ただし、大村さんの中峠式の研究史の説明にもあったように、そうした類型が一括出土土器において全部揃うわけじゃないですよ。これとこれがここにあるけど、これはないとかっていう不安定な状況の中から、「武蔵野台地型」の加曽利E式が成立してくる。じゃあその成立した加曽利E式は、前の段階のどの類型の中から出現するのか、それをこれから整理しなければいけないですね。

小林：

わかりました。ごめんなさい、熱くなってきたところなんですけど、そういった出土状況を含めて、ぜひ2月の新地平シンポ（註：2025年2月2日に小林、黒尾らが計画していた「新地平シンポジウム2025 新地平スタイルの30年」（場所：東京都埋蔵文化財センター会議室）を指す）でまたお願いしたいと思います。ちょっともう討論は時間的に終わりなんですけども。

大村：

先ほど、原山遺跡で中峠5次2住型が出たということだったんですけど、間違いです。台耕地型深鉢の類似です。すみません。記憶が錯綜してしまして。

小林：

もう一つだけ言うと、私に質問としてですね、神奈川考古と下総考古の研究活動の内容の違いと共通性について教えていただきたい、とあったんですけども、神奈川考古、というか神奈川シンポジウムとかですね、それは先ほど私が言ったのは行政単位ごとにやったということです。下総考古学研究会で進めていることとかも、地域編年を基軸にしているんですけども、その辺は新地平編年も同じですけども、単に行政単位ではないということです。お互いそれぞれ、行政でも行政内研究者と呼ばれますけれども、各々その土器を研究している方々が注力してやっているのは同じだと思います。

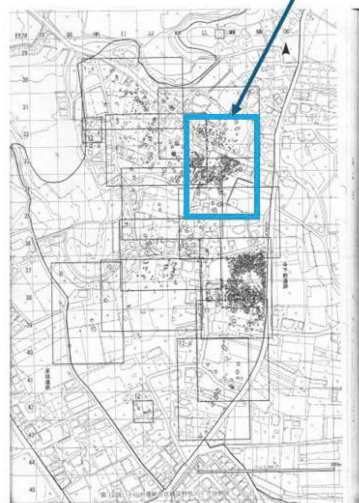
最後、もう一つ東西関東などの編年対比をやりたかったんですが、それは明日、後半を含めてやりたいと思います。今日はこれでおしまいにしたいと思います。どうもありがとうございました。

「中峠式土器」 層位資料

ー 討論第1日目大村発言関係スライドー

1

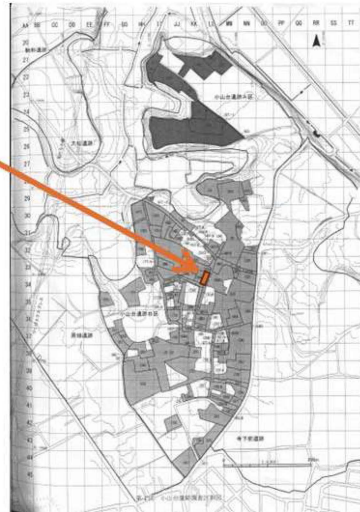
柏市小山台B区エリア4の位置（青枠 西川
ほか2019）



2

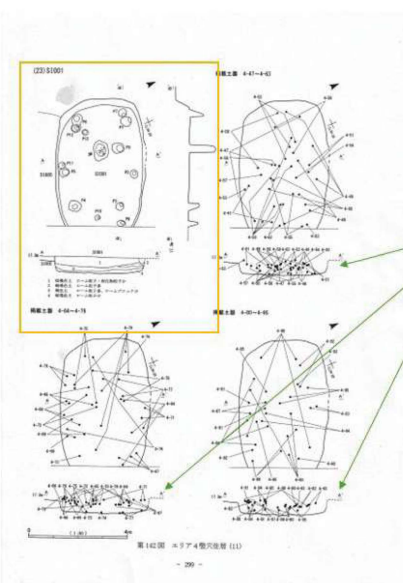
大村提示スライド①

小山台B区エリア4の中の23区的位置（茶色部分 西川ほか2019）



3

柏市小山台遺跡B区 エリア4（23）001
平面図・断面図など
西川ほか（2019による）

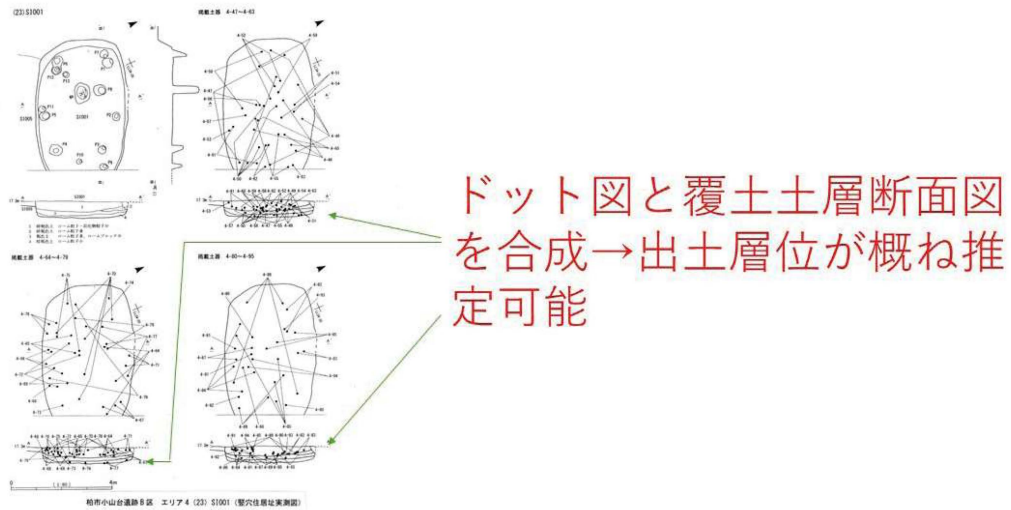


遺物の出土位置を示すドット
と層位との対応関係が不明

4

大村提示スライド②

小山台遺跡B区エリア4（23） S001



5

大村提示スライド③